

## 要 旨

『今昔物語集』（以下『今昔』と略称する）は日本古典において、説話文学の最高峰といえる代表的な作品である。『今昔』の成立時期を平安末期とされ、平安朝の国風暗黒時代を経て、国風文化重視の気運が高まるなかに、隋・唐からの大陸文化の受容と消化によって、日本の文化・文学はどのように変化したのか、特に、手本とし続けていた大陸文化はどういうふうにも本土化されたのか、その代表作『今昔物語集』、殊に震旦部の依拠資料の受容と変容を通してその一端を解明したいと思う。

『今昔』の構造については、国東文麿が提唱している「二話一類」論のように、巻十の「漢前帝后王照君、行胡国語第五」、「唐玄宗后上陽人、空老語第六」、「唐玄宗后楊貴妃、依皇寵被殺語第七」の三話は中国の後妃に関する説話の話群をなしている。巻十の出典資料は『俊頼髓脳』と『注好選』だけであるとされて、換言すれば、撰者は作品を創作、編集していた時期、手元に中国に関する参考資料が非常に少なかったことが推測できる。それに、依拠となった『俊頼髓脳』は歌論書として、和歌を解説するため適当に物語を加え、その説話自身はすでに日本化していたと言えよう。震旦部の物語と言えども、説話中に和臭が溢れていることは一目瞭然である。そこで、本稿では、中国側の依拠資料や故事そのものの伝承の研究を参照しながら、『今昔』震旦部の后妃説話の成立や説話における日本的要素、あるいはその和様化する方法や構想を探り出したい。

小論の第一節では、まず、中国における王昭君の文学形象を検討して、その文学形象の成立を究明する。そのうえで、震旦部における王昭君説話と中国故事から受容した要素との相違点を論じて、『今昔』の独特な風物や心情の描写を分析することによって、説話に混じりこんだ日本的要素——「物哀ナル」情緒を明らかにし、また、楊貴妃説話と上陽人説話のこの点における共通性を論じる。

第二節では、唐詩、特に白居易と同時代の詩人の詠んでいる詩歌における上陽宮のイメージを検討して、中晩唐の士大夫が国の衰えつつある状況への感慨や悲哀な心境を論じる。それから、白居易の『新樂府五十首』は「諷諭詩」の範に属していることを論証し、そのなかの一首である「上陽白髮人」における唐の後宮制度を批判する態度を証明する。だが、日本における『上陽白髮人』の受容は美人の容貌に関する「臉似芙蓉胸似玉」の描写、「耿耿残灯背壁影、蕭蕭暗雨打窓声」という情趣のある風物描写に止まっていて、寂しい宮殿で空しく一生を過ごした美女の悲しみの物語となってしまう、いわゆる日本的な誤解ということ論証する。

第三節では、『今昔』における楊貴妃説話の独特である「天皇自ラ宮ヲ出テ遊ビ行テ」という描写に重点をいれて、『古事記』や『源氏物語』などにおける天皇または貴公子が御幸や狩りする際に自ら美女を見つけて結婚する先例をあげながら、このような発想が『今昔』の独創ではなく、古くからの伝承であることを明らかにする。また、光り輝くような娘の描写と衣通姫伝説や『竹取物語』との受容関係をも検討し、今昔説話における物語の伝奇性やロマン性を究明する。